

ある。こうして本書は、表題からは三者の均等な比較が予想されるかもしれないが、実はトマス色をいくらか帯びたものとなっており、トマスの思想の体系性が読者に伝わると同時に、行為論におけるスコトゥスの繊細さや鋭さ、オッカムの新しさが伝わる書となっている。Osborne 自身は、「結論」の章において、「本書が、かれら [三人] の哲学的見解はそれ自体で重要であることを示したことを望む」と言っており、たしかに、三人の神学者それぞれの立場が或る視角から明快に提示されている点でその希望は達成されている。もちろん、三人の行為論を比較するための他の論述の方法もあり得るだろう。

本書において考えさせられるのは、西洋中世における倫理思想関連の語彙の意味の変遷であろう。たとえば、「外的行為」といっても、オッカムはそれを単に natural act であると考えるとか、スコトゥスにとって「選択」は二義的であるが、オッカムは一義的に使用するというように、同じ語の異なる意味での使用や多義性や変遷について Osborne は注意深い。一方、スコトゥスの使用する affectio という語を inclination と訳して、トマスの場合の意志の natural inclination に言及するときのように（第 1 章）、異なる言葉が同じような意味で使用されている場合の比較や論述に関しては、より念入りに検討するときには警戒が必要になるであろう。用語の変遷や分類の問題は、中世のスコラ学者の行為論の場合にかぎらず、比較研究にともなう根本問題であるだけに、本書は比較研究の方法論についても考えさせられる書である。

---

大森正樹著

『観想の文法と言語——東方キリスト教における神体験の記述と語り』

知泉書館, 2017 年, xvi + 507 + 16 頁,

ISBN: 978-4-862-85265-6, A/5, 7,000 円

---

袴 田 玲

本書は、「観想 *θεωπία*」を中心テーマとして、東方キリスト教思想家——主に『フィロカリア』中に収められた師父たち、ディオニュシオス・アレオパギター

ス（6世紀頃）、グレゴリオス・パラマス（c. 1296-1359）ら——のテキストを分析した哲学的著作である。

著者の大森正樹氏は京都大学医学部卒業後、同大学大学院文学研究科にて故・山田晶氏の薫陶を受けてトマス・アキナス研究に従事し、その後エックハルトにおける「エッセ」の問題をテーマとした修士論文を執筆中に、V. Lossky, *Théologie négative et connaissance de Dieu chez Maître Eckhart* の中でビザンツ帝国の神学者グレゴリオス・パラマスと初めて出会われたという。南山大学短期大学在職中（後に南山大学教授、現在は同大学名誉教授）の1984-86年にはローマの東方教会研究学院で在外研究を遂行され、T. Spidlik 氏に東方霊性の手ほどきを受けて本格的にパラマス研究、東方キリスト教研究を始められている。1988年には宮本久雄氏、谷隆一郎氏と共に『エイコーン——東方キリスト教研究』を創刊され、同誌創刊メンバーを中心に2001年からは東方キリスト教学会を組織し、会長職を歴任するなど、大森氏が本邦における東方キリスト教研究を牽引されてきたことは周知の通りである。『中世思想原典集成』に収められているパラマスの作品はもとより、ニュッサのグレゴリオス『雅歌講話』、東方キリスト教の伝統の中で修行を積んだ師父たちの詞華集『フィロカリア』、さらにトマス・アキナス『神学大全』（第17冊第2-2部34-56問題）など多くの翻訳も手掛けられ、日本の読者にとって中世キリスト教の思想世界に触れる契機を提供し続けてこられた功績は大きい（本書評執筆中にも、同氏の翻訳されたパラマスの主著『聖なるヘシュカストたちのための弁護』が知泉学術叢書第2巻として出版された）。2000年には創文社より『エネルギーと光の神学——グレゴリオス・パラマス研究——』を上梓され、もって京都大学より博士号（文学）を授与されている。大森氏ご自身、「翻ってみれば、トマスに始まり、エックハルトを経て、パラマスに到る私の稚拙な歩みは、ほとんどすべて、人間の神認識にかかわる問題であった」（『エネルギーと光の神学』、前掲書、あとがき、p. 374）と述懐されている通り、広く東西キリスト教世界にまたがる思想家を研究対象とされるなか、人間の神認識を問うという同氏の姿勢は一貫しており、本書のテーマである「観想」も同じ問題系列に位置づけられることは言うまでもない。本書は、大森氏が主として上記『エネルギーと光の神学』を上梓されて以来発表されてきた17の論文を基に構成されており、その概要は以下の通りである。

本書は第1部「テオリアの光景」、第2部「擬ディオニュシオスをめぐって」、

第3部「パラマスの思想とパラマス主義」という全3部から成る。

まず、第1部第1章「アトスの修道士ニケフォロスにおける東方靈性（ヘシュカスム）のかたち」、第2章「祈りの方法論」、第3章「観想における *φαντασία* の問題」では、13-14世紀アトスの修道士（ヘシュカスト）の間で実践されていた祈りの「方法」あるいは「精神-身体的技法」について記された3つのテキストが分析の対象となっている。13-14世紀のアトスでは「イエスの祈り」を絶えず唱えるというヘシュカスムの修行の中で、身体を内側に丸め込むようにして座り、呼吸を調整するという実践が盛んに行われており、これら3つのテキストはその「方法」についての具体的な指南書として流通し、『フィロカリア』中に収められて後代への影響も大きかったものである。大森氏は、これらのテキスト中にある呼吸についての記述をとくに取り上げ、ヨーガや仏教のマントラ、スーフィーのズィクルなども引き合いに出しながら、果たしてヘシュカストたちの呼吸についての指南が「方法」「技法」と呼べるような性質のものであったのか、つまり、祈りの実践に対する何らかの方法的・体系的認識や、何らかの明確な手順を踏んで初歩の段階から高度な段階へと進んでいくような体系的方法が確固として存在しているのだろうかと問われる。大森氏は結論を出されるにあたって慎重だが、呼吸は自己の内面を静謐化し、自己自身に集中し、注意を自分に向けるために重要であり、その意味で精神-身体的技法と言うことは可能であるが、そこで目指されているのはあくまでヌース（後述）の制御であり、ヘシュカストたちの呼吸そのものへの関心は薄いとの見通しを示される。実は、ヘシュカスムにおける精神-身体的技法をどのように評価するかということは、ヘシュカスムをどう定義するかという問題にも通じており、研究者の中でも意見の隔たりが大きい。その点、大森氏は前著『エネルギーと光の神学』においても「身体もまた祈る」（第3部第3章）と題された章で修行と身体の問題を考察されたが、本書においてはさらに踏み込んだかたちでヘシュカストたちの祈りの「方法」そのものについて現段階でのご自身の見解を明らかにされたということになるだろう。つまり、一方でヘシュカスムを一種の技法論として捉える見方を退けながら、他方でヘシュカスムを精神主義的に解釈することもなく、身体性を靈性の中に取り込まんとする修道士たちの苦闘としてそれを理解するのである。「精神のみの存在ではなく、身体を伴った（というより誤解を恐れず言えば、身体そのものである）人間の自己に聞き耳を立てるという行為は生易しい行為ではない。しかしそれをしな

いかぎり、いくら修行をしても無駄であろう。心や身体の語る言葉をどれほど深く聞き取れるかが分かれ目である。神を外在化させず内在の神に聴くという行為がそこでは必要なのである。」(本書 86 頁)

次に、第 1 部第 4 章として、ヘシュカストたちの祈りに関して中心的役割を果たす「ヌース」についての論考が置かれる。周知の通り、ギリシア語の *νοῦς* という概念は、古代ギリシアの哲学者たち、とりわけ新プラトン主義の哲学者たちの世界観の基礎をなす三つの原理的存立階層の一つとして重視され、本邦ではこれまで「知性」「理性」などと翻訳されてきた。しかし、東方キリスト教の師父たちはヌースに関する古代ギリシア哲学の伝統を受容しつつも、この語を祈りの実践に即してより具体的に用いており、その射程の広さを踏まえ大森氏はあえて「ヌース」と片仮名で記される。本章では、プラトン、アリストテレス、プロティノスといった哲学者におけるヌースの用法を概観した後、東方キリスト教の師父たちにおけるその用法が検討され、最後には西方のアビラのテレサのテキストも比較考察される。その中で、東方の師父たちはヌースを魂の能力の一つと捉えると同時にそれを心(臓)と結び付ける傾向があること、また、彼らはギリシアの哲学者たちのヌース観を引き継いでいるものの、哲学者たちによって気にも留められなかったであろうヌースの弱点、手に負えない面をも詳細に伝えていることが示される。そして、このように東方の師父たちはヌースを幅広く捉えることによって、かえって人間存在の重層性を示していると結論される。本章で引用されるテキストは哲学者たちのものにせよ、東方の師父たちのものにせよ、ごく限られたものではあるが、ヌース概念を介して古代ギリシア哲学と東西キリスト教思想を通して眺める試みとして極めて示唆に富むものとなっており、また、新プラトン主義思想にも東西キリスト教思想にも明るい大森氏であるからこそ可能な論考でもあり、いずれ劣らぬ本書の論考の中でも必読箇所である。

続いて、『フィロカリア』を「観想の文法書」として捉える第 1 部第 5 章を挟んで、第 1 部最終章では神現の場としての「闇」をテーマに東方キリスト教の思想家たちのテキストが分析される。ここでは、旧約聖書、フィロン、ニュッサのグレゴリオスのテキストに表れる闇について検討された後、パラマスにおける神現の場としての闇の理解が分析される。大森氏はヘシュカスム論争の中で論敵となったバルラアムとパラマスに関し、両者における闇の捉え方の違い(それはディオニュシオス解釈の違いでもある)と、その問題が否定神学の身分の捉え方の

違いにも繋がっている点を明晰に分析されている。本章の最後（すなわち本書第1部の最後）で「燃え尽きざる茨のイコン」と「変容のイコン」という二つのイコンに見られる闇の表現が分析されることは、観想の問題を「具体的な現場」で捉えるという本書の（とりわけ本書第1部の論考に共通した）テーマをよく表していると言えよう。闇が分析される中で人間の神に対する強い思慕と熱情が浮き彫りとなり、東方の修道者・信者の姿が眼前にリアリティを持って立ち現れる。

本書第2部ではディオニュシオス・アレオパギテースの思想とその解釈が問題となる。第2部第1章では『神名論』におけるテアルキア *θεαρχία* という語の用例が検討され、神 *θεός* や神性 *θεότης* といった言葉との異同が明らかにされる。大森氏の精緻な検証についてその詳細をここで述べることは避けるが、同氏がディオニュシオスの言語行為を「キリスト教を新プラトン主義的に変容したのではなく、キリスト教が先行するギリシア的な神概念とは異なるものを持っていることを明確に示そう」とするものとして理解していることは特筆に値する。テアルキアという語も、神の超越した面と、被造物とかかわってそれらを神化するという一種のオイコノミア的側面を含意し、さらに神の三一性との関連で使用されていると大森氏は指摘される。神化は神の人間に対する愛の働きの発露であり、（あくまで三に留まる）神の内なる三者の交わりは被造物には内密のものであるが、この調和的交わりそのものがそもそも神の根源（テアルキア）であり、「三」という多性が「一」という単純で、全一的なものとして統合されることに「神性」の神性たるゆえん、すなわち「テアルキア」があると結論される。

続く第2部第2章でも『神名論』が考察の対象となるが、ここでは「神名の『記述』と『語り』」というそのタイトルが示す通り、（個々の神名の解明というよりは）神に名を付与するという人間精神の構造の解明に力が注がれる。神名を知り、それに呼びかけることは「讚美」に他ならないというディオニュシオスの言葉の奥に、大森氏は受肉の秘義の内在的理解への促しを読み取られる。

「否定神学は肯定神学の裏返しか？——否定神学の現代的意義——」と題された第2部第3章では、これまでの精緻なテキスト分析からしばし離れて、否定神学という言語行為そのものが考察の対象とされる。そして、「虚無主義の真っ直中にある『神なき時代』」における否定神学の復権、そしてそのための否定神学的論理の構築が訴えられる。「目指すところは、肯定神学でもなく、肯定神学ならざるものでもない、否定神学でもなく、否定神学ならざるものでもない。この

間の消息を十全に表現する論理の場。」(本書 255 頁)

第 2 部第 4 章「秘義的秘跡と観想——擬ディオニュシオス『教会位階論』の構造(第一章, 第二章より)——」は, ディオニュシオスをめぐる第 2 部の論考の中で, 第 1 章と並んで重要な論考であろう。大森氏はディオニュシオス文書の中で唯一邦訳の存在しない『教会位階論』を取り上げ, とくに同書全体の概観として「ヒエラルキア」について論じられる第一章, および, 洗礼の秘跡 *μυστήριον* (= 神からの照明) について論じられる第二章を分析される。ここで問題となるのは, ディオニュシオスがこれらの言葉をキリスト教的文脈で用いているのか, それとも非キリスト教的な(古代ギリシアの密儀宗教や哲学の要素を含みこんだ)意図を持って用いているのか, という点である。大森氏はここでもディオニュシオスをキリスト教的立場に立つ者として捉える見方を示すが, 「そもそも〔靈的〕解釈としての観想を, 神との一致という行為を抜きにして, ディオニュシオスは考えていない」という。つまり「天使界の地上的展開を教会のヒエラルキアに見る考えをもつディオニュシオスにとっては, このヒエラルキアにおける秘跡を通して, 当然神的なことからの秘義が具体的に姿を取って現れるのであり, その姿を人は観想して, 神の神秘に参入するからである」(本書 276 頁)。この指摘によって大森氏は, 観想における具体的行為や物質の意義を改めて示しておられるように思われる。

第 2 部の最終章には「パキメレースによる擬ディオニュシオス解釈——ビザンティンのテキスト解釈の一例——」と題された論考が置かれる。本論考は, ディオニュシオスの『神秘神学』の解釈をめぐって, ゲオールギオス・パキメレース(1242-c. 1310)と彼が依拠するスキュトポリス=マクシモスのそれぞれの釈義を検証するものであり, ディオニュシオスがどう解釈されたかという問題を, (しばしば議論の俎上にのぼる西方での事例を通してではなく) 東方キリスト教世界の内部で, しかもビザンツ帝国時代の事例を通して理解しようという貴重な試みである。

最後に, 本書の最終部として第 3 部「パラマスの思想とパラマス主義」とまとめられた 6 つの論考が置かれる。

第 3 部第 1 章「パラマスによる擬ディオニュシオス解釈の一断面——ディオニュシオス『スコリア』援用の問題——」は, パラマスの『神の統一性(一性)と区別について』という作品を基に彼の提示した「神におけるウーシアとエネルゲ

イアの区別」という神学的・哲学的問題を改めて取り上げようという意欲的な論考である。ここでの大森氏の意図は、パラマスのこの説を「先行する諸教父の見解を総合的に述べたもの」として擁護する正教会の学者と、「パラマス独自の、正統から逸脱した謬説に近いもの」として非難する（とくにカトリック側の）学者との双方に対し、真実がその中間にあることを示し、さらにパラマスの説にスキュトポリス＝マクシモスの『スコリア』からの影響が強いことを示すことにある。

第3部第2章「神の本質の把握不可能性について——東方教父とトマス・アクィナスの解釈——」は、「見る」「把握する」という語に着目し、ニュッサのグレゴリオス、ダマスコのヨアンネス、パラマスら東方教父とトマスの神の本質の把握不可能性についての議論を比較考察することによって、東方と西方の考え方の特質を明らかにするものである。大森氏はすでにこの問題について前著『エネルゲイアと光の神学』の中でその素描を示していたが、本章ではそれぞれのテキストを基に詳細に吟味されている。その中では、西方の「知解を求める信仰」と、東方のあくまで霊的なものとしてのヌースによる認識（理知としての側面は二次的に留まる）という態度から帰結する両者の相違点を指摘しつつも、通常言われるような大きな隔たりよりも、むしろ両者の類似点を示すことに力が注がれている。

第3部第3章では、『聖なるヘシュカストたちのための弁護』と並ぶパラマスの主著の一つ『百五十章』を考察の対象に、パラマスの自然学が考察される。ヘシュカスム論争で論敵となったバルラアムとの対比から、パラマスにはしばしば当時の自然科学的知見とは無縁のアンチ・ヒューマニストとのレッテルが貼られるが、ここで大森氏はそれを反証される。パラマスにとって自然とはその中で神を観想する場、神へと至る道筋の導入部分として捉えられており、その意味で自然が一種の「アイコン（聖像画）」として見られていたとの指摘がなされる。

第3部第4章「神の場とエネルゲイア——パラマス問題解決の試み——」は第3部の中心となる論考である。ここでは質料・物質とその神化が大きなテーマとなっており、プラトンやプロティノスといった古代ギリシアの哲学者たちの世界創造説のみならず、古生物学者・地質学者であったイエズス会の思想家 P. Theihard de Chardin (1881-1955) の著作 *Le milieu divin* における物質の神化の議論をも援用しながら、パラマスのエネルゲイア論を理解しようという果敢な試みがなされる。本書 419 頁の図は大森氏によるパラマスのエネルゲイア論理解のこれまでの到達点を示すものであり、この世界において神のエネルゲイアの発

露としての神性の充溢的展開が見出され、その最終段階の先取りとして「無限を有限なものに採り入れるという不可能事」——人間の最内奥たる心・カルディアにおける神との親しい交わり、イコンという物質的形象を通しての神の現存の感知、そして聖体礼儀——が実現しているとの見通しが述べられる。

第3部第5章「ヘシュカスム論争とは何であったのか——バルラアム『第一書簡（一-二九）』を通して——」では、「地理的にきわめて狭いと思われる地中海地域でどうして聖霊や神認識へのアプローチが異なったのか、そうしたアプローチをとるメンタリティの相違は何なのか」という問いをめぐって、A. Fyrigosらイタリア人研究者の間で近年盛んになっているバルラアム研究の成果を取り入れつつ、フィリオクエ問題を論じるバルラアムの『パラマス宛第一書簡』の一部が詳細に検討されている。J. Meyendorffらによって過度に貶められた感のあるバルラアムの思想を再評価し、パラマスとバルラアムの思考法や論法の違いを客観的に示そうと尽力される大森氏の試みは、翻ってパラマス理解にも大きな進展をもたらす、複雑極まりないヘシュカスム論争の真相を解明するための大きな一歩となるだろう。

かくして、本書の最終章となる第3部第6章「スコラリオスによるパラマス解釈（緩和されたパラマス主義）」において、スコラリオスを例に後代のビザンツ思想におけるパラマス受容と西方神学からの影響が考察された後、7頁にわたる本書全体の最終考察が置かれて本書は締めくくられる。

以上概観してきた通り、本書で目指されているのは、観想という本来語り得ないものを何とか語りだそうとした東方の師父たちの言葉に丁寧な耳を傾けることである。体験そのものには言語の介在する余地はないこと、言語による記述に限界のあることを承知で、それでも言語によってそれを表現した師父たちのテキストを、著者である大森氏もまた、その制約を引き受けつつ言語を用いて可能な限り分析し、詳述されている。とりわけ、その多くが論理性や一貫性を殊更重視することのない東方の師父たちのテキストと向き合う時、その困難は大きい。それでも、あたかも自ら体験したかのように一足飛びに幽玄の世界の側から語るようなことを大森氏は決してなされない。原典テキストを丁寧に分析し、最新の研究動向も抑えつつ、あくまで学術的かつ哲学的に、こちらの世界の側から彼らの体験に一步步つ迫られる。大森氏のその姿勢に、最大限の敬意を表したい。

また、「実践なくして観想なし」という理解の下、ヘシュカストの祈りの精神-



身体技法，イコン，洗礼や聖体礼儀といった典礼をも観想言語に含めて考察される点や，ヌース・質料・エネルゲイアといった鍵概念を軸に，古代ギリシア哲学思想から末期ビザンツキリスト教・哲学思想に至るまで見通せる点も，他の著作にはほとんどない本書の大きな特徴であり魅力である。必要に応じて参照されるトマスの議論も，表面上の安易な比較を警戒しつつなされた慎重かつ説得的なものであるように思われる。本書が東方キリスト教思想研究を志す者にとってはもちろんのこと，トマスやギリシア哲学（とくに新プラトン主義思想）に関心を寄せる者にとっても，通常「近くて遠い」と思われがちな東方キリスト教思想を理解するための手掛かりとなる極めて有益な書であることを書評子は確信し，多くの読者に恵まれることを願う。

---

八巻和彦著

『クザーヌス 生きている中世：開かれた世界と閉じた世界』

ふねうま舎，2017年，509頁，ISBN: 978-4-906-79168-2, A/5, 5,600円

---

宮本久雄

#### はじめに

本書は八巻氏がN・クザーヌスの思索と実践を深く背景・根拠としながら，人間と自然が疎外されている現代において「他者」との出会いを構想し，その実現の道標を示している壮大なスケールの書である。副題は，人間が相生<sup>1)</sup>・居住できる「閉じた世界」とそれが他の「閉じた世界」と交流する「開いた世界」への越境も「他者」との出会いの道筋を示しているといえよう。本書評子は大概そのように本書の核心を捉え，それをふまえて本書の荒筋を辿りつつ，書評子の感銘を受けた点や私見などで補足的にコメントしていきたい。

---

1) 書評での用語「相生」は「相生かし相生され相生く」の意で「共生」よりも深く他者との絆を示す語として用いられている。